

6 寛政四年刊『花供養』

底本 月明

校異 河野美

花供養

(表紙・題簽)

(表紙見返し)

月雪のながめはさらなり。

されど、花鳥の情ぞ一きは

心うきたつ春のあした、東山

の像前に例のごと捻香頓首

して己／＼がにくさを捧げ、

かつは近き遠きにおなじ志

ある風士の吟をもとりそへて

万代の外に伝へんとす。
供養の俳諧もて、巻の
はじめにおくこと旧に
ならひてしかり。

寛政よつのとし

山亭拝

(序一ウ)

風流のみちの栞ぞさくら花

山亭

声あげわたる春の諸鳥

闌更

建直す台崩すもあたゝかに

白黛

下百性の札提て来る

柏由

嵐して堰とめし水に小浪打

古塘

夕寂しきむらさめの跡

浮遊

張替し障子に月の澄のぼり

龍美

うなゐひとりに秋を慰む

貞松

自ら萩の長者と名に驕り

不朽

酒桶横にほしならべをく

白眉

乾鮭を一駄送りて戻る也

桃睡

風ふきねちるとぼし火の影

青錢

濺たる劍の水をいたゞかせ

呉雪

みな投つけて碎く皿鉢

在貫

市中の人去果る夕曇

其成

三尺むけし松のあまはだ

土卵

鵜の休む白き巖に月移り

斗流

法の因みに夏住居して

百池

引出す黒髪永き飯の中

眉山

吾妻の末に笠停む頃

可能

直切の杭にも花のにほひけり

幽明

麦藁苞の鰯つかみける

角蜂

陽炎の思ひもよらぬ処より

月峰

狐の穴に御捻をおく

自来

傾城の清水がもとに立寄て

芦涯

たはれごとのみいひあへる也

杜桂

浮雲にちら／＼雪の窓の先

得終

壁生草の黒くなりぬる

演之

四十にて死ねと書しもことはりや

駟鳴

酔どれどもの世をそしり居る

臥虹

なま中に棚なし小船波をきる

周山

雷や落らん松煙りたつ

投我

塔のみに今は名もなき法観寺

二雷

猛者引すゝむ捨石の上

松路

右

下略

花のかげ薺つむのは主なるか

肥前諫早

白鷺

うき雲の根ざしは遠し山桜

文若

さく花のもとに居眠る雄猫哉

孤石

曙やさくらに旅の眼をこする

鯉仙

色色に散るや野の鳥花の鳥

君廬

花咲て顕るゝ島の家屋かな

濃波

軒の花几の塵と散にけり

梅江

白雲や花に粧ふ筑紫不二

東伴

よしの山のさくらも同じ桜かな

青虎

深山辺や天狗倒に花の散る

尾山

月の出て花に別るゝふもと哉

梅路

花にさへ散る日は欲の散けり

梅枝

山里や花うちふるふふる薙

春芦

反古干に出ては花をゆすりけり

少年

芦月

蜂むれて林の中やちるさくら

都友

花ぬすみほむるも花の主かな

輝白

山はさくらさすがかざらず繕はず

文塘

いかなくに風もつ花の夕かな

江良

雲下りていよ／＼白し山桜

亀水

日もながく回るなるべし花の山

雨夕

朝照の峰にしらつく桜かな

玉李

帰には月を荷ふて桜かな

肥前島原

樂只

御幸かなけふ桜戸の並はじめ

文知

雪と見て只花がちに桜かな

湛露

行先に春の有つく桜かな

一壺

散比に人の最中や花の山

平戸

有無

分行くや花見の中を油売

皿山

雪卮

麓よりつらね／＼のさくら哉

肥前熊本

橘泉

夕ぐれや桜に狂ふ僧一人

李夕

浦里や網干す花の前後ロ

起龍

古き世の唄も交て花見かな

万戸

花を見るけふ我人の顔若し

英之

花ちら／＼散かゝる岩の不動哉

柳園

分入て水上見たり山ざくら

深里

花さくや薫道あげるまた隣

酒仙

遅ざくら又来ん春の記念かな

蘇泉

人すまぬ小家もゆかし山ざくら

松童

うき／＼と花に出て行癪かな

箕溪

花みちて花こそ見えね夜の山

綺石

夜のはな散るかたよりぞ月告る

靈沾

木兔のねぶたき顔や花ぐもり

歌舌

足もとに花の瀧あり峰の坊

栄子

人去てしら雲下りぬ暮の花

百児

咲花や野鍛冶が軒に人の声

潭月

傍の松に鶴来ぬ花七日

谷尾ザキ

抱琴

山寺や桜に青き篋竹

山鹿

驢童

酒のまぬ人は香に酔花見哉

求麻

石羊

又けふも隙ぬすみ行花見哉

有之

宵月は桜のあまり見る夜哉

禹功

狩暮すさくらが本の夜は月夜

半橋

見せ申母の笑顔やはつ桜

李程

とふ人はまた男也はつざくら

熊本

芦隠

栗の毬踏て驚く山さくら

奥ツガル

宜応

心して筏棹させ峰のはな

浦圭

花守の夜あらしいとふ侘寝哉

其流

雨雲の色にも染ず山さくら

春潮

夜ざくらに羽たゝきいとへ泊り鳥

文石

たのしさに亡友思ふさくら哉

卜貞

花守よ酒ふる舞んひとつ舞へ

吾舟

戻る時初て凄し山さくら

呉江

明がたや朧はなるゝ山ざくら

桃仙

鐘つきの袖にすれけり糸桜

草夫

さくら花雨に定て夕ながめ

露牛

人去てさくら且散る夕かな

雪鬼

百年の句塚をいとなみ

花栽て遠き主をしたひけり

クロイシ

梅成

すぎはひやは是を折売初桜

羽ノ久保田

五明

歌仙表

散るはこそ供養もあらん花も人も

、柳沢

蕉夢坊

春は名のみ山ほとゝぎす

瓜英

いなみ野や霞の裾に水戸守て

儲香

三ツ輪くみつゝ梳する

有之

月の比旅に瘦たる駒ならむ

蔦橋

すだれを捲し白萩の雪

文杏

岩橋のおもかげ深し夜の花

甲ノ平岡

如雪

吹るゝもうれし桜の袖に散

河内

川里

あの雲も散ゆく花のかたみ哉

小笠原

右書

桜見や木樵の道に迷ひ入

箕風

雨晴や雲も障らぬ山桜

三枝

ふかれては虻の声散桜かな

玉河

長崎車文が遅翁と号よと

たはれしをおもふ

遅ざくらうき世やかれも一さかり

静管

日の影もゆらるゝ花の盛かな

出羽左沢

露橘

尼寺もけふは留守也花の山

紫夕

嘘いはぬ人の誘つ初ざくら

素風

夕栄や情かぞふるさくら人

備中倉敷

露朝

寺の門しめてぞ花の静也

寄人

世の中や花にかくるゝ里もなし

芥舟

咲にけり大悲の御手のいと桜

玉井

さとられぬ世をさとりけり山桜

桃朶

うらゝかな日は一しほに花曇り

軒雲

しづけさや翌の噂の山ざくら

亀几

此あたひ申さず花のちる夜哉

烏夕

小雨してあしたの浅黄桜かな

南枝

雪水やにはかに花の橋供養

伊与今治

車南

山ふかく鐘きこえけり夜の花

晴際や花をせり出す花の雲

柴の戸を極楽にして桜かな

又奥に能花ありや花を踏

猿啼て花のあけぼの静也

よちのぼる山やたやすく散桜

ふところは曇り初けりはつ桜

たちならぶ塩のけぶりや夕桜

粥喰て七日籠りぬ花の山

筑前飯塚

挹波

琴秋

蔦輔

蚕月

几風

竹両

奇峰

莞爾

枕石

文をしてある人告りはつ桜

舎丁

宵闇やわづかにさます花の酔

梨雀

朱の鳥居中にとりまく桜かな

遊水

炭焼の娘にあひぬさくら狩

士沢

ながめ置く花は翌日ある命哉

植木

湖桂

花さくやうき世の中をおもはれず

女

ゆふ

静さやさくらに曇る明の山

何来

雲に動くこゝろを花の朝朗

直方

奇木

人に洩てすがた霞や花の主

涼眉

重ね／＼枝分つ也明の花

可角

いづれ夢桜三世のひがし山

飯塚

文里

花の香や罪なき僧の住処

直方

雨菰

花の宿日裏のかたを尋ね梟

橋雨

一木なる花やむかしを思はする

遠子

物売も花の香を出る東寺哉

桃雫

目は花に居て河原に來りけり

裡梅

大原や花に往來の草むすび

蝸石

夕暮の雲すみのぼる桜かな

ワカミヤ

文鯉

ちる花や車の簾風たえる

素釣

散うきて泡に見なせる桜かな

クラテ

蘭溪

花の雪うつるや眉の水かゞみ

僧

其外

散る花に裳かゝぐる小姫かな

木耳

桜／＼峰は日脚の曇りけり

花情

夜の花や我にすかれる蛇一ツ

里桂

夕暮や賦を諷ひ行花の中

蘆江

幕絶へてけふは葉がちの桜哉

後風

花過て間遠になりぬ夜の夢

豊前小倉

南明

山売て花見る客と成にけり

サツマ鹿兒島

和水

極樂は外にはあらじ花の山

雲蝶

咲つゞくつくしの花を供養哉

可立

花ぐもり唯花皿の音のみぞ

備後三原

梨陰

折捨て凋むも花の最中哉

土芝

散る花をつけて行けり墓の面

逢芳

かはる／＼花見の留守の狩かな

吾中

花一本ゆづれる畔に添てけり

何笠

我人の桜咲けり春のそら

加賀金沢

馬来

折／＼や夜半の桜に雁の声

凌冬

散あとの花たしかなる梢かな

北雁

寺町や花見くらべん西東

霞外

酔ざめや桜にうつる山の月

可兆

こゝろざまやさしかれとや花見連

一道

人通る畑のそなたや花の里

南峰

こゝまでは去年も来たり花の山

僧

文顯

野曇りや里は桜の花ざかり

野芹

糊こわな小袖出しけりはつ桜

身につかでもどる家路や夜の花

初月の峰も幾つかさくら狩

なかば散桜にそひて峰の雲

野ざくらや児供遊す松葉かき

花の山猿の声さへにぎはしき

子供衆やかた路駕に嵯峨桜

花ありとおもふ寢覚や障子越

商人の心やすめるさくらかな

漁船

如方

其青

十廿

五曹

勇夫

犁松

楚流

涼花

二三里を一日がけに花見哉

そつくりと眠る鶉や山ざくら

墨衣はづして持や山桜

花折て桂へもどる暮の船

青麦の畑買ばやさくら狩

岡の花外に米搗家もあり

故郷の母に見せたき桜かな

はつ桜其日も已に暮にけり

見に入は紙漉く里の桜かな

完車

鯉湖

馬水

白義

大溪

岐北

花翁

梅曉

泊鳩

折／＼は柳のすれて桜かな

雨柳

ふさ／＼と名桜さけり雨の門

柏舟

桜見や中の十日は一ゆるぎ

其石

我宿や花に絶さぬ酒二升

百来

行違ふ人は多けれ桜山

九夏

桜さく山／＼明の薄もよひ

夏陸

山本やさくらが中の石地藏

里叟

駒繫ぐ柳おしえてさくら守

女
枝水

桜見や舟と陸との声合

ノト宇出津
黄鳥

ちる花に頭のかゆき日和かな

、

柏茂

花の香におぼれて寝ぬか夜の鳥

、

百几

酒のみの扇遣ひや花の本

、

合黎

花曇り傘提し大工かな

加賀金沢

松菊

夕山やさくらが上の人通り

蘭尾

朝ぐもり桜出て来る掃除坊

、宮腰

竹之坊

幾人か花にうかるゝみあげ皺

金沢

馬仏

うつろひを見せて夜に入桜かな

阿石

山ざくら中に四五本千もと哉

菱歌

西山の日はまだのこる桜かな

呉流

ゆたかさや花の中行牛の面

魯畔

まどろみの夢にも花を見る日哉

如蘭

日のあしも静けき花のさかり哉

鈍鷺

散初る花を敷寝や泣上戸

車大

抱上て子に折せけり山ざくら

一川

遠山や花をわかるゝ雪の星

烏甲

花ざかり瀬多の長はし朧也

高松

如水

見かへれば花の芳野か花の雲

素吟

峰わたる花の気色や朝嵐

舟呼

振袖の門たち見たりいと桜

邑戸

日や斜御幸過ての花の雪

来正

一重づゝちらばともあれ花に風

青錢

渡し坊や人なき朝の花曇り

金沢

更々

檜より杉の深さやはなの雪

其子

戯や賃馬駈出す花の中

小松

汀画

村雲の晴行あとの桜かな

金沢

とみ

道色／＼心は花のひとつかな

ツ

二笑

先へだつ人をなぶりて花見哉

ツハタ

風逸

花の本いかつに人の顔白し

金沢

梅嶺

夕暮や花散る丘の鋤つかひ

一抄

目がはたて麓は近し遅桜

兔文

暮あひや児を呼歩行花の中

阿青

明ぼのや花とはみえぬ松の中

伊賀名張

一応

庭の花散果て屋根の普請哉

、

岷異

清らかや花の浪汲む閼伽の棚

、上野

一如

夜桜や時／＼ならず鳥の鶯

能登

峰芷

花時や簾つゞくる膝行人

暮留

荅から人にしられつ初ざくら

モロハシ

巴丈

曙や花に夢見し宇津の山

ワジマ

柳眉

雨の花僧都ゝむ鐘楼かな

タツノハマ

李溪

馬繫ぐ上野の花のほこりかな

御園

四山亭

岩窟を越ておどろし花の奥

白子

指月

中絶し人にも逢ふや花の比

里旧

夕栄や花さく岡に人の声

無友

前髪の方主にはづす花見哉

菊阿坊

花さら／＼散行中の破家

泮水

みよしのや世を一円にはな心

津

雁路

何なくと花に宿せん奥山家

矛滴

引越て花の田舎の住居かな

画橋

あぢきなや花さく比の朝嵐

麦秀

能因の晩鐘にくし山ざくら

憂玉

幾人も花に薄らぐ青みかな

石薬師

甘谷

木の下に栄花定るさくらかな

珉山

古木にもむかしわすれぬ花の笑

既白

太刀もちを召すゆかしさや桜狩

山田

栗花

照る星のくぼみて花の真空哉

白子

宇兆

馬道へ出て照かへる花ぐもり

能登僧

巴陵

唐人に見せばや花のよしの山

イセ寺家

五瀬

なまぐさき水のたまりにちる桜

帯川

手鼓や桜折る間の乱れ打

無曲

恋草や長が井筒の糸桜

三階

五橋

花一木人声満るすだれかな

李青

ひとり春の山をめぐり

友ありや吸壳薫る花の下

二ノ宮

指月坊

杯のさし敷花にわすれけり

久居

如水

花に添て乳母はなく子をすかしけり

桃川

よく見ればさくらが本の桜かな

雨青

野の末や花に暮行はな心

二宮

椿葉

遠山や花にすれ行ながれ雲

ノト七尾

暮臘

大空に花の香満る曇かな

其之

山入や水音あらし遅桜

菊人

紙漉を下に見て行桜かな

于康

月落て花と定る尾上かな

嵐樵

雲水にうつらふ花の夕かな

河芳

あけぼのゝ桜に直き小雨かな

微斤

散る花に馬の瞬く昼間哉

荻邑

散る花を鎮めて薙の上手哉

川田
佳超

水色のかはるや堀の花の影

乃至

ちら／＼と何降暮や花の里

武部

好古

雪見えて桜のたかき禁かな

五雲

夜ざくらに灯移る舟の鞍かな

二ノミヤ

兎泉

霞より上に遠山ざくらかな

花岑

陽炎の真昼を埋む桜かな

ハマ

雨卜

小ざくらに身を隠したる坐当哉

七尾

呂代

さかりなる桜に人のなき日哉

幾必

山陰や桜にしらむ朝日請

九何

島の山雲井につづく朝日かな

嘯雅

玉垣の外見る谷のさくら哉

三ノ

只人と見えぬ白髪や夜の花

為一

桜見し其夜はやすき心かな

石支

花にくれ朧に匂ふあらし哉

不染

もゝはたゞ檜の木原の桜かな

春瓜

岩陰や花を見付てまきり舟

一形庵

晚鐘の遠音に散るや遅桜

李月

奥里や家毎に見ゆる山桜

百爾

花の山蜂の巣つかむ坐当哉

クロシマ

玦卜

花に埋む弥勒の堂の夜明かな

岐草

乞食に花折貰ふ女中かな

都山

静かさや常念仏の花の奥

笋牙

召つれし児まいらするさくら哉

布遊

花咲て鳴かぬ鳥なき山家哉

柳汀

山本や花に付たる車あと

文朝

花咲や夜半を過る沓の音

馬涼

花ざかり見るとなふ児の機嫌哉

梨邑

鶴啼て花も興あるさくら哉

玻井

魂在す思ひを花のはやしかな

麦秀

鈴鹿山鬼もなき世の桜かな

素玉

いざゆかむ花は翌又あらふ共

ノトへ

北生

山鳥の幾代を經りぬ遅桜

錦川

玉史

くんだり坂や花にうたるゝ牛の面

ノトへ

朝々

水匂ふみなもと床し花の春

金丸

花の山哀なりけり鹿のほね

桂

人声や花を離るゝ鳥の声

子行

石打て蝙蝠出さん泪の花

埜鳥

川舟や人声曇る花嵐

管史

花売やあとに荅の打こぼれ

破衣

子鳥の花ぶさ落すゆふべ哉

壺涼

散る花に濁りを上る小魚かな

千路

文中

汐くむや花と岩との間より

可上

初花に伊勢の司代の白髪かな

飯田

記史

やゝけぶる瀧のしぶきや遅桜

カヅ

眉山

道問へばやはり桜を目当哉

二ノ宮

柳枝

杉山の奥静なりはつぎくら

久江

後流

庭の花ぬか火に曇る山家哉

所口

定斎

あれ／＼し木々の中より初桜

万遷

酒酔の骸あつけし桜かな

馬涼

門を出て三井寺諷ふ花見哉

巻如

花ざかり家の建たきふもと哉

双我

有明に山は桜のうねりかな

タツノハマ

太牙

鏡磨越路の花にもどりけり

ノトベ

麦杜

坂口は松重りてはなの山

越ノ高岡

馬丈

嚙な都被のうへに散る桜

青河

おもたげに花をつくねてよしの山

亀台

山下や桜にうづむ賤が家

史甫

散行とおもへば花の胡蝶哉

之柳

花守の寢覚床しや破れ窓

東河

山ざくら桜に付て咲にけり

那ち

大西

昼前や桜見て来るわらは病

里泊

分入て琴柱拾ひぬはなの山
二階から杯投るさくらかな
恐しうのぞけば溪の桜かな
柴人に顔みしらるゝ花見哉
花の山もどりは道を忘たり
深山路や藤橋つたふ桜がり
酔さめて見る時桜散にけり
花の雨五尺に結ぶいほりかな
なよ竹にすれてこぼるゝ桜哉

麦秀
友卦
分路
李芳
鳥川
山喜
白老
如友
二翼

花山や花に心の我まどひ

明神浦

礒仙

詠入てかなしきほどに暮の花

城端

而章

汐風になれて花咲く浦輪哉

亜三

散る花に畦を覆ふ被かな

吳晁

山門の音や桜の朝ぼらけ

文江

山寺の桜にくゝる御手の糸

嵐艾

花手折人に寄添ふ雅かな

卜史

小坐敷や宗和折敷に花の影

巨山

花の雲もろこし舟も渡りけり

島平

音羽山の嵐はきのふ今日の花

杜市

のぼるともおぼえぬ道や花の山

富山

花来

初花に足駄ゆるさぬ門の内

今石動

文亀

島山の松に暮初む桜かな

高岡

楚吟

世は桜人を饗す網代笠

久々湊

湖龍

九重の味のつくまで花見哉

生地

士沈

枕高ふ寝る代の上に桜かな

氷見

杜朋

只の木に馬を繋て桜かな

素秀

遠山や月の上なる花曇り

林亭

みのむしの桜にすぎる雨氣哉

馬十

渡月橋

散る花や月と橋との中に落る

芸州

凡十

雨晴や雲に繼足す山桜

御手洗

淡水

花守の我世にもどる嵐かな

南枝

芳野への道聞人や花の友

川尻

東升

六尺の花につかえる天窓哉

小方

可友

髪結て翌の花まつ心かな

豊後

山離

山里の朧氣もなき桜かな

房イリムラ

楚流

中／＼に弥生の空や花曇り

倭風

花に心移せば近き外山哉

英

翌／＼と誘合たるさくらかな

きん

花の山翌の近道見て置ん

知水

遠山や花の霞の猶ゆかし

紅枝

花の本に田螺も売や隅田堤

梅岐

散行ば散来る花の嵐かな

路翠

思寄す花に行也遊さき

此君

散かゝる花より牛の細目哉

江ノ水口

潮花

長閑さや坐当うかれて花に泣

土山

月窓

酒取にもどる人あり初桜

七条

其道

一日見て跡参らせんはつ桜

爾流

散さくら二王の腕につもりけり

辻村

釣我

花霞山動くかと見えにけり

シノハラ

暁宇

雨風や花散る筋の生嗅き

守山

李明

花さくら千代の古道ぬかり道

二保

思赴斗

柴舟に散込む志賀の桜かな

江頭

吟水

花に暮る人な咎そ市もどり

カタヽ

未角

咲揃ふさくらが本の花曇り

草津

月桂

岩窟の花や哀に雉子の声

北湖南

湖龍

花七日我に二日の隙もなし

舟木

圃丈

迎も散る嵐も花の景色哉

西湖大留

瑳雀

夜を行や花に背おひし筑紫琴

柏由

香や洩れん朝日に絞る花の露

石部

亀淵

我は花に酔ふてうかれし乱哉

守山

花橋

踏めて草なかりけり花の下

江東

霞川

散る花に無明の酔は醒にけり

杉江僧

素風

花の中にするとき門の二王哉

水口

梨風

けふもまた一人は医師よ花の連

湖東

烏月

炭負ふた人に問けり初ざくら

江ノ山上村

鷺橋

制札や花に余情のいやまさる

草津山寺

玉水

野はづれや花にとゞきし世の人氣

来石

九重や花に日比の曇りなき

可能

目うつりや花を行過往かへる

辻村

多洗

凋むまで花見て御座る仏かな

蓮車

紙むすび是も名の有桜かな

江東

有隣

花の香の交る火縄の匂ひ哉

来小人

谷／＼は埋がごとし山ざくら

このめ

山賤の袖へ吹込むさくら哉

狂笑

初ざくら樺も浅黄もなかりけり

武江戸

菊明

山ざくら蝦夷を去事一百里

行脚

瓜坊

さくら咲て氈にしかるゝ董哉

カヅ

つよ

興に折や花にのぼりし肩車

武本庄

一馬

北嵯峨や花の盛の鐘供養

みつ

日を送る深山ざくらに世棄人

双鳥

散初て散る日も花の五七日

李明

仁和寺や人の背たけの花の雨

若ノ小浜

陶河

吉野何我一もとの桜咲き

百馬

散る花や入江の魚の浮つるゝ

西津

柳只

花散て水甘嗅き谷間かな

巴陵

山高く花の麓の一里塚

漁林

花一本多賀の鳥居と咲にけり

古橘

初花を見越して雪の高根哉

鬼雀

花の香と我と残りぬよるの山

備中笠岡

文里

磯山や船にながむる朝のはな

備後福山

李朝

いと桜糸にみだれてちる日哉

田房

古声

花咲てあかるき山路／＼かな

知風

散る花の嵐にうつる姿哉

斗外

瀧壺に凄さわするゝ桜かな

備前岡山

子坤

吟ふや花にうか／＼二里三里

丹後河守

沙鸚

外堀や桜散夜の水黒き

橋立

裸木

世わたりや花におぼれぬ薪取

南紀

横馬

庭の花見る人も家守も我

河守

梅居

来るも／＼男也けり山ざくら

如暁

伐れたる枝もつふ／＼山桜

無諍

花の山や桜の山や人の嘘や

丹波

洞々

独見る物あはれさよ山ざくら

可休

来て見ればふもとに雲や吉野山

東岐

手折らせぬ人の誠やちる桜

河内星田

田毛

見よがしに女房連けん花の山

ツシマ

孚湫

寺あればいにしへよりの桜哉

石ノ銀山

臥山

松さくら風二筋に分りけり

遠ノハマ松

白輅

花の山松は色より暮にけり

撰ノ兵庫

岩苔

花守よ樹を抱て泣か行春に

河ノ福島

蓼花

乞食は近よる花の鴉かな

但馬

因山

花ざくらはなん不死の薬也

駿州

如竹

日ざかりや花の中道人に酔

志鳥羽

蒼梧

人散て我は可笑き花見哉

紀みなべ

梅旭

散かけて花のいざよふ夕かな

尾張

士朗

花に出て齡を松に契りけり

羅城

いとまなき人にも逢ぬ花の中

五周

八重桜夕旦はなかりけり

物載

如月も後の二本を遅ざくら

素外

羅城律師が芳野行脚を思出づ

遅ざくら僧は吉野を出つらむ

桂吾

長閑さや散るさへ花の一重宛

紀鳳

行越して桜見付る月夜哉

臥央

夜ざくらの奢つもれば朝寝哉

甲州藤田 可都里

初瀬寺や念じて行ばはつ桜

漢甫

休らふて海見る花の余興哉

作良

はつざくら曇らぬもまた風情哉

唐笑

誰をかも松の木の間に遅ざくら

鰍沢

蘆船

夕山や桜にちかく押寄る

岷山

夜ざくらや人を誘はゞ更ぬべし

甲ノ藤田 黒沢坊

桜戸や人を見に出る坊が妻

下毛柏木

尺樹

何人の娘なるらん花の窓

魚尺

花咲て酒の都となりにけり

文賀

誰殿の使なるらんはつ桜

文化

夢にさへ桜見る夜と成にけり

野雀

夕月や田毎に曇る花一本

坊州上ノ関

百樹

鋸挽も花見に薙とられけり

三尾

宇宙

山深し花より上の水の音

上州境町

専車

下戸ばかり橋わたりけり花戻

西ノ関

龍山

散る日こそ桜の山に暮過る

語山

散る花に噂さす谷の蛙哉

白質

散る花を追行花のこゝろ有り

橋ノ小ノ

君中

花清し庭に一日鳥の跡

沾節

時今ぞ一鞭急げ花の山

花桂

花なれや帰らんとすれば我に散

浪花

尺艾

寺々や都は花に能曇り

不休

抱上て扇に乗せん糸桜

馬物

なつかしや花に垢つく墨衣

夢明

誰が足の跡と桜の散し上

盛雅

望まれて枝折まどふ桜かな

てる

類なや花ちる里にすむ月夜

江涯

花さくや扱東大寺西大寺

イタミ

老橘井

葉なきうちをさかりや山桜

蒼水

蝶々やちいさき花を撰歩行

貫風

東路の花みな富士に移るかも

大坂

画涼

ひやり／＼かほに降也夜の花

多武峰

芦雪

夕栄や下戸の面も桜色

如意山

残月

飛花落花何れ錦の嵐山

其童

夢のごとし花の上行月の影

城南寺田

秦夫

色とめで日暮るゝ花の曇哉

雲裡

夕がたや花の間を花のちる

良水

弓矢すてにおこたる花の夕日哉

城南佐山

馬雪

明の香に桜詠る山路かな

巨口

夜あらしのねためる花の朝寝哉

魯長

花に口あんがり唾か聾か

八ハタ 古律

花に酔ふて浅水踏や大井川

麦子

酔て寝る人も有けり桜狩

平水

ほの明石西須磨かけて花曇

ダイゴ 仏大

散らんとす花に子に臥寅に起

八ハタ 斗流

鯨とれて此年浦の花見哉

蛙方

花の香にしみ込もせぬ骸かな

深草 礮水

立聞や琵琶打軒の夕桜

サカ 一鳥

散る花に心のうつる庵かな

馬士諷や駄路の花の咲初る

花移る水に浮たる小魚哉

なまなかに散らで難面し雨の花

嵐山にて 前書略之

見くらべど花は芳野の種ながら

音聞て見かへる瀧や花の山

衛士のたく火に白妙の桜哉

寺さびて花の落つく山辺哉

峨乙

杏露

露口

素供

如泥

黛露

甘古

岳肥

桜さく辻かひもとや古都

沙長

桜かな岩角迄も小袖づれ

必蔵

雨はるゝ計も花見心かな

楓沙

活て我ことしも花に逢日哉

杞柳

見おくれし人の心や遅ざくら

百鳥

白拍子すがた斜に散さくら

桃之

祖父祖母の小竹筒つめたし遅桜

一峰

山もとや桜にへだつ人の顔

角蜂

花最中水上曇る思ひ有

青芽

我まゝに花のしがらみ見る日哉

自来

夕月の高くかゝるや遠桜

月峰

鶯も人なれにけり山ざくら

杜桂

いとまなみ夜桜を見る勒哉

呉雪

ほのかなる夜の山辺の桜かな

尼

得終

散花や一くづれつ暮かゝる

不朽

木のもとへはしり着たり花の山

都雀

花間へばあるじは二日うつゝかな

菩山

鐘の音も沈むや花の春の暮

子衿

杣もけふ斧ふり兼し桜かな

箕山

花見客花に酔たる人見へず

素文

柴荊も雲分来るや山ざくら

秋者

帰れとは花不言くれの鐘

呂蛤

花ざかり人顔うとく見ゆる哉

蔦蝶

花のあるうちが花なる山家かな

二雷

たび人のしばし宿かるさくら哉

何龍

数盃のめどえ酔ぬ花の真盛

羅外

遠山や散る花に雲のみだれ寄

古塘

花守に見とがめられし白髪かな

貞松

さく花に老がこゝろのいそぎかな

五雲

濃く薄く色重りぬ遠桜

定雅

花咲て鐘を撞さぬ施主もかな

斗雪

花やかな浮世につれぬさくらかな

湘夕

人影もともに散らむ雨のはな

渡牛

たそがれとなりて桜の風情哉

柳光

雨の夜を薄月影のさくら哉

蒲月

花二本里を隔てゝ散にけり

薰河

水に移り兎角さくらの静也

在貫

天狗住と聞て桜の曇り哉

白黛

釈迦堂に傘をまつ花見哉

玄兔

年／＼やたえぬ言葉の花供養

土卵

花に捨し身の浮瀬や大堰川

幽明

雨の花つら／＼夢のはじめ哉

一照

散花は情こぼるゝと思ふかな

其成

いぎたなき鳥はあるまじ朝桜

浮遊

日に三たび気色持けり花盛

百池

花鳥もきなれて咲ぬさくらかな

車蓋

月の本に暁のさくらの雫哉

嵐月

嵐山黒き羽織にちるさくら

蘆涯

日暮らすはいつをはてなる花見人

桃睡

山住やあたら桜に人ぎらひ

闌更

追加

下陰や月さへからむ花の暮

上毛宮ザキ

朔宇

濁ける花にしたふや山根川

、

評一

独入て友よぶ谷の桜かな

、

玉支

八十あまりいける甲斐なる桜哉

一ノ宮

羽黄

闇の夜や桜に明て鳴からず

、

尺龍

靄日もる岡辺の花に尾長啼

下仁田

暁鳥

山寺や花吹ちらす古畳

、

江朝

夜桜や油かすりし石灯籠

松井田

松和

散花を梢にまどふ松蘿

田島

南浦

山ざくらこぼすがごとく散にけり

上州前橋

李雪

浦風や桜吹ちるはなれ島

女

斗米

山門に酒ゆるせかし花ざかり

杉雪

ちればちる詠ありけり花の山

女

記之

散花に麝の音ぞ無念なる

土卵

おなじ色の桜にけふも暮に覺

輪賀

見るうちは花の主とおもふ哉

四祖

風の桜手をかさねども是非もなき

素同

日にむけば目のくらみけり山桜

洛

完而

雲か花か鐘つく峰の朝朗

サツマ

春厩

花がきの庄は耕すさかりかな

、

立蘇

寝てもやゝ花におかるゝ心かな

阿久根

朝瓜

さくら花散るは空の曇り哉

、

机翠

見ぬ人に薰れ深谷の遅桜

長州赤間関

南巢

ちる花を吹しらむ月の夜明哉

、

里山

盃にちるや桜の八重一重

、

如翠

小袖ながらぬれてもみばや花の雨

、

凌来

咲みつる花の中洩る月夜哉

、

左定

何事を花に告るのか虻の声

、

模稜

池の面ちる花の泡水の沫

、

羅風

糸ざくらうたがふらくは花の波

、

薰里

花ちりてやすくぬるよと成にけり

信松本

可考

徒な雲みなきえてさくらかな

西万木

仰高

桜さく崖の下みち有やなし

大津

如々

山中や志賀も都も花の雲

井子

あけはつる雲のさかひや山桜

石州口原

万鼓

打はれて咲ものこらぬ桜かな

芳野

可翠

花に一夜桜に一夜有明し

若州

沂山

塩だちに瘦て花見の留守居哉

、

鷺少

朝の花青みの中に一つらね

越中福光

波弓

風絶て花に居眠る僧都哉

筑前直方

君花

捨てたきうき世に花の罪深し

讃州仁保

指馬

雪空はあこがれぬるや雨の花

白羽

花の陰するどき川の水煙り

宗徳

煙たつ空や闇ゆく花の山

満里

一宿枕かさぬるさくらかな

下総長者町

正翠

夕栄や桜に繁く牛の面ヲ

加州

風手

花盛り日なれて川の水増り

、

舟苔

散花の朝に床し遅ざくら

、

闌下

桜より暮て縄手の人通り

、

卜舟

守る花や科戸の風の雲を吹

八幡

鯉文

峠にて杖を尋る花見哉

日向美ノ津

一甫

約束の時刻延るや花戻り

可楓

少し酔心できたり花の陰

雨卜

春中の花に破るゝ衣かな

深草

巴橋

明の香にさくら詠る山路かな

城南

雲坡

幸と世にうとまれて花見かな

ゝ

五牛

杣人に田楽やかす花見かな

備後福山

一声

客ひ事忘るゝころや初桜

信州塩奈田

柯則

京に来てむかししれとや花盛

加賀

龍石

山風や山をはなれてちる桜

宇治

方外

炭火さへ吹やむ花のあるじ哉

淡路溪竹改

黛葉

やすらはで画にうつしけり花の山

酒田長尾

路平

花のおく静けき杉の黒みかな

辻村

千鶚

夜ざくらやしばし君まつ絵蠟燭

ゝ 女

りき

一えだに花の盛としられけり

洛

舎男

我こゝろもとめ得にけり初桜

越中

淵美

山桜かはる詠やみねめぐり

サツマ

賀松

明しらむ山の姿や花朧

ゝ

其柳

とても散る花にしあらば吹嵐

信州塩石田

文濤

花千本庵に一木のさくらかな

江ノ土山

素風

下臥や花に埋るゝ人の数

行脚

甫尺

道のほど近さに暮る桜かな

越後十日町

桃路

八重一重花咲うき世ごゝろ哉

ダイゴ

百喟

其ものに付て其ものを

そこなふときけば

曇りなき桜に花のくもりかな

城南大久保

衣翩

名のみの朧月は澄らん

あふひ

音ンとれば右方左方の春富て

下方

くつね寄り来るめなもこの原

翩

飯持て汁に行日の初霜は

ひ

軍なき世を祖父の匍匐

方

右洛東芭蕉堂花供養之日於城南栗猥山史明閣

捻香之表

遅来

山畑やひと木立たるおそ桜

甲斐東郡

石牙

声きかぬ鐘をめぐるや夕桜

琴雪

戸を明て桜見えゐる月夜哉

梅夜

火ともせば虻の声あり夜の花

里塘

此ほどや人に馴たる花の鹿

何鳥

夜に入ば又舎りたきさくらかな

菊児

桜さく陰に臼造る山家かな

蕪人

山里や都近まるはなざかり

魚藻

人の来て我も花見るゆふべ哉

春路

世中の望思はず花のかげ

李之

此筋や木樵も通ふ山ざくら

石州日原

義昼

京三条通寺町西江入丁

蕉門書林

菊舎太兵衛梓

(三九ウ)

(裏表紙見返し)

(裏表紙)